

# サエを含む文の意味表示

田 中 大 輝

# サエを含む文の意味表示

田 中 大 輝

## 1. はじめに

「太郎さえが焼酎を飲んだ」などに見られるとりたて詞サエについては、古くよりその意味や用法を記述しようとする試みが数多くなされてきた<sup>(注1)</sup>。たとえば、代表的なものである宮田 (1948)、寺村 (1991)、沼田 (1986、2000、2009 など) では、それぞれ次のように述べられている<sup>(注2)</sup>。

- (1) a. 著るしい例を挙げて他のばあいを類推させるために用いられる (「顕著例取立て」<sup>(注3)</sup>) (宮田 1948 : 180)
- b. P と対応するとふつう考えられる N のセットの外、あるいは範囲のぎりぎりのところにある X を P と結びつけることによって、その事態の尋常でないことを強調する、というのがこの文型の一般的な表現機能である… (以下略)<sup>(注4)</sup>。  
(寺村 1991 : 105)
- c. 主張 : 断定・自者－肯定  
含み : 想定・自者－否定 / 他者－肯定<sup>(注5)</sup> (沼田 2009 : 174、(9))

これに対し、田中 (2010)、田中 (2012) では、サエを含む文が表す意味のうち特に「意外性」および「焦点」にそれぞれ注目し、従来の分析に批判的検討を加え、認知科学 (特に生成文法) の立場からサエを含む文の意味の形式化を目指してきた。そこで、以下では、まず第2節で田中 (2010)、田中 (2012) の議論を概観し、続く第3節で「随伴命題の不可欠性」と「スケール」に着目することにより、田中 (2010)、田中 (2012) の分析を補う新しい分析案を提示する。最後に第4節でまとめと今後の展望について述べる。

## 2. 田中 (2010)、田中 (2012) の概観

### 2. 1. 意外性について (田中 2010)

サエに「意外」の意味があることはよく知られていることであるが、田中 (2010) ではそこからさらに考察を深め、サエを含む(2)の文が、下の「状況1」では適切に使用できるのに対し

(2)

て「状況2」では適切に使用できないという違いに注目した。

(2) 花子が太郎さえを誕生パーティーに招待した。 (田中 2010 : 36、(2))

(3) 「状況1」

花子が、普段から仲良しの一郎、次郎を誕生パーティーに招待した。さらに花子は、(普段まったく交流のない、いじめられっこの)太郎を誕生パーティーに招待した。

⇒ 「<sup>ok</sup>花子が太郎さえを誕生パーティーに招待した。(=(2))」

(4) 「状況2」

花子は大富豪の娘であり、毎年、絢爛豪華な誕生パーティーを開催している。ただ、今年は趣向を少し変え、学校のクラスメイトのみを対象として、そこから抽選で選ばれた数名だけをパーティーに招待するという。当日、運良く招待を受けた私がパーティーに出席してみると、なんと、クラスメイトでもなく、そもそも花子の知り合いでもないはずの太郎が、花子お手製の招待状を持って参加していた。

⇒ 「#花子が太郎さえを誕生パーティーに招待した。(=(2))」

(4)の「#」は、当該の状況でその文の使用が不適切であることを表す。「状況1」も「状況2」も、どちらも「太郎が誕生パーティーに招待された」ことは意外なことであるはずであるが、(2)の文の容認性に違いがある。田中(2010)では、「状況1」と「状況2」には(5)のような違いがあることを指摘し、(2)の文は、単に太郎が花子に招待されることの意外な候補であるだけでなく、もともとは「太郎は招待されない」と思っていたのでなければ適切に使えないと論じた。

(5) (田中 2010 : 40、(7a)、(8))

a. 「状況1」

(太郎は花子と普段まったく交流がないということから、)

「(普通なら)太郎は花子に招待されない」ことが積極的に想定される状況

b. 「状況2」

(そもそも太郎は花子の知り合いでもないということから、)

「太郎が花子に招待されるかどうか」について、まったく念頭にない状況

このような例から、田中(2010)では、サエを含む文「XサエP」(「X」はサエがとりたてている要素(=焦点となっている要素;上の例では「太郎」)を表し、「P」は共通点として

比較の対象となっている開放文(上の例では「花子がxを誕生パーティーに招待した」を表す)が適切に使用できるためには、「X」が単に「P」が成り立つことの意外な候補であるだけでなく、「X」は「もともとは『 $\neg P$ 』であると思われていた」ものでなければならないと考え、「X サエ P」の意味表示 (Semantic Representation; SR) には次のような部分が含まれていると主張した。

(6) 「X サエ P」の意味表示 (SR) (田中 2010 : 45, (15))

P (X)

$\neg P(X)$

(6)の P (X) というのは「X が P である」という命題で主張を表し、 $\neg P(X)$  というのは「X は P でない」という命題が消されたという前提を表す。つまり、(2)の文は、「花子は太郎を誕生パーティーに招待しない」と(話し手は)思っていたが間違いであったことを前提として「花子が太郎を誕生パーティーに招待した」と主張している、ということである<sup>(注6)</sup>。

## 2. 2. 随伴命題について (田中 2012)

また、サエを含む文には、表面に現れないものの、話者の念頭に置かれているような命題が存在する。この命題のことを以下では随伴命題 (shadow sentences)<sup>(注7)</sup>と呼ぶことにする。たとえば、次の「状況3」で(8)の文が用いられるとき、随伴命題は「次郎が焼酎を飲んだ」である。

(7) 「状況3」

焼酎好きの「次郎」だけでなく、普段酒を飲まない「太郎」が焼酎を飲んだ

(8) 太郎さえが焼酎を飲んだ。(田中 2012 : 158, (2))

このようなことから、田中 (2012) では、田中 (2010) の分析を修正し、「X サエ P」の意味表示 (SR) には次のような部分が含まれていると主張した<sup>(注8)</sup>。

(9) 「X サエ P」の意味表示 (SR) (田中 2012 : 180, (51))

P (X)

$P(x)$

$\neg P(X)$

(4)

[P(x)] というのは「xがPである」という前提を表す<sup>(註9)</sup>。xは自由変項であり、文脈によって補われる。たとえば「状況3」における(8)の発話の場合であれば、「x」には「次郎」が入り、最終的に(10)が得られることになる。

(10) 文脈により自由変項が補われた後の(8)の SR (田中 2012: 180, (50))

[ $\lambda x_i. x_i$ が焼酎を飲んだ] (太郎)

[ $\lambda x_i. x_i$ が焼酎を飲んだ] (次郎)

$\neg$  [ $\lambda x_i. x_i$ が焼酎を飲んだ] (太郎)

つまり、(8)の文は、「次郎が焼酎を飲んだ」ことと「太郎は焼酎を飲まない」と(話し手は)思っていたが間違いであった」ことを前提として「太郎が焼酎を飲んだ」と主張していることになるのである。

### 3. 本稿の主張

#### 3. 1. 随伴命題の不可欠性

田中 (2010)、田中 (2012) では詳しく言及してこなかったが、サエを含む文を適切に使用するためには随伴命題が必要である (随伴命題が想起できない場合にはサエを使用することはできない) ことは強調しておく必要がある。たとえば、次の「状況4」で(12)は不適切である。

(11) 「状況4」

冴えない数学者である山本氏が、数学上の未解決問題のひとつであるリーマン予想を解こうとしていた。誰もが「彼などに解けるはずがない」と思っていたのだが、ある日、山本氏はリーマン予想を証明したと発表し、学会に提出した。学会の慎重な調査の結果、なんと、山本氏の証明に間違いはないことが確認された。

(12) #山本氏さえがリーマン予想を解いた。

山本氏はリーマン予想を解かないと思われており (もともとは『 $\neg P$ 』と思われており)、それが実際には「山本氏はリーマン予想を解いた」であった (実際には『P』であった) のであるから、前節の「意外性」の条件は満たしている。それにも関わらず「状況4」で(12)が使用できないのは、まだ誰もリーマン予想を解いた者がいないため、「xがリーマン予想を解いた」という形式の随伴命題が作れない (文脈にも既存の知識にも、自由変項 x を埋められるもの

が存在しない) からである。そのため、似たような文であっても、随伴命題を作れるようにすると、サエは使用可能となる。たとえば(13)は問題なく容認可能であろう。

- (13) (学年一の秀才である栄一だけでなく、なんと、成績が学年最下位である) 太郎さえが(難問であった) 問題 9 を解いた。

また、もちろん、(12)と同じような文でも、随伴命題が「x がリーマン予想を解いた」という形式にならないようにすれば(つまり、焦点が「山本氏」とならないようにすれば)、サエの使用は可能である。たとえば、(14a, b) はいずれも容認可能であるが、随伴命題はそれぞれ「松本氏が「ホッジ予想」を解いた」「富岡氏なら「 $P \neq NP$  予想」を解決できる」である。

- (14) a. 今や数学界はお祭り騒ぎである。なぜなら、高齢でもう画期的な研究はできないと思われていた松本氏が「ホッジ予想」を解いただけでなく、なんと、世界的にまったく無名だったあの山本氏さえが「リーマン予想」を解いたのだ。  
b. あの山本氏さえが「リーマン予想」を解いたんだから、数学界の若きホープと期待されている富岡氏なら、近い将来「 $P \neq NP$  予想」を解決できるはずだ。

澤田 (2007) は、随伴命題の存在はサエの付随的な機能であり、随伴命題の存在を含意することはサエの使用の目的ではないと考え、(15)の概念を用いて(16)のように述べている(註10)が、本稿では、上記の理由により、随伴命題の存在を前提とすることはサエの重要な働きの一つであると主張したい。

- (15) 澤田 (2007) の分析を理解するのに必要な概念

a. 【命題関数】

話し手が不変化詞で提示した要素を変項に置き換えて得られる命題。変項と解釈される要素はその焦点によって決定される。(澤田 2007: 15 「定義 1」)

b. 【対照集合】

命題関数を満たす可能性のある要素の集合であり、語、動詞句、文の 3 つのレベルが存在する。話し手は、共通意識から聞き手も同じ対照集合を想定すると仮定する。(澤田 2007: 15 「定義 2」)

c. 【E 値 ; EXPECT 値】

話し手が、表現時以前の聞き手との共通知識から、対照集合の要素が、命題関数を

(6)

満たすことに関して、期待・予測する主観的な評価の度合い。話し手は、聞き手も同様の E 値をもつと仮定する。(澤田 2007 : 15 - 16 「定義 3」)

d. 【E 値のスケール】

対照集合の要素を「EXPECT 値」の大きい順から小さい順に並べた順序集合である。(澤田 2007 : 16)

e. 【E 値の最小値】

E 値のスケール上で命題関数を満たす最後の値。(澤田 2007 : 73)

(16) 随伴命題の存在に関する澤田 (2007) の見解

a. 話し手が「さえ」を使用するとき、提示した要素が命題関数を満たすことを聞き手に伝えることを目的とし、他の要素が命題関数を満たすかどうかということを含意することは目的ではないと考えられる。(澤田 2007 : 74)

b. 提示した要素以外の対照集合のほかの要素が命題関数を満たすという「も」がもつような「他の要素が命題を成立させる」という機能は、「さえ」の付随的な機能であり、「さえ」の基本的な機能は、提示した要素が話し手の信念内の E 値のスケールの中で真として成立する最後の要素であることを示すことであると考えられる。(澤田 2007 : 75)

随伴命題の存在に関しては、坂原 (1985) も、(17)が「近藤はねずみ以外のものを食べた」という前提を持たないことから、「さえの存在の前提は、恐らく、段階の前提の副産物でしかないから、(略)簡単に破棄できて当然である」(p.145) と述べている。

(17) その場所には、他に何も食べるものがなかったので、近藤はねずみさえ食べた。

(坂原 1985 : 144, (14))

しかし、(17)は、「近藤は何も食べる場所がないような特殊な状況にいる」ということから、「泥水を飲んだ」や「葉っぱを衣服代わりにした」というようなことを行ったのではないかと想像できてしまう点に注意してほしい。このような随伴命題を念頭に置いていたのであれば、「ねずみ以外のものを食べた」が成立しなくても(17)が容認可能になるのは不思議なことではない(この場合、「ねずみ」ではなく「ねずみを食べた」を焦点化して解釈していることになる)。その証拠に、(18)のように、「泥水を飲んだ」や「葉っぱを衣服代わりにした」ということが想起できない状況にし、「ねずみ以外のものを食べた」も『『ねずみを食べる』以外のことをした』も成り立たない(随伴命題が作れない)ようにすると、「近藤はねずみさえ食べ

た」は容認不可能となるのではないだろうか<sup>(註11)</sup>。これはまさに、サエを適切に使用するためには何らかの随伴命題の存在が必要であることを表している。

(18) 状況 5

近藤は三時間前に無人島にやってきた。来てすぐ何もせず眠り始め、三時間ずっと眠っていた。目が覚めて、食べるものがなかったので…

(19) #近藤はねずみさえ食べた。

さらに、沼田の一連の論考(沼田 2009 など)も、澤田(2007)や坂原(1985)と同様、随伴命題の存在はサエの付随的な機能であると捉えており、随伴命題に相当する部分を「含み: 想定・他者-肯定」と定式化している(本稿(1c)参照)。その証拠として挙げられているのが<sup>(20)</sup>である。つまり、たとえば(20a)であれば、「他の皆がだれも行かない」にもかかわらずサエが使用可能であることから、「他者-肯定」の部分は「断定」ではないという主張である。

(20) a. 太郎さえ京都に行くのに、他の皆がだれも行かないのは不思議だ。

(沼田 1987: 77, (19))

b. 冬子は夫にさえ隠している真相を、単なる友人の私などに話した。

(沼田 1987: 77, (20))

しかし、(20a)では、「他の皆」で指示されている人物群以外で「京都に行く」人物がいることが想起でき、(20b)では、夫以外に真相を知らない人が存在することが想起できるため、いずれも随伴命題は存在しうる。随伴命題を作ることができる状況においてサエが適切に使用できるのは不思議なことではない。沼田の一連の論考は焦点要素と同類の要素を「自者」と「他者」の対比で捉えようとしており、他者を「自者と端的に対比される「自者」以外の要素」と位置付けている。だからこそ「他の皆」「私」以外の存在には注目しなかったのだと思われるが、随伴命題 P(x) の「x」に入るのは今話題になっているもの(自者と端的に対比されるもの)に限らない。「何でも良いので、しかし必ず何か「x」に入るものがなければならぬ」というのが随伴命題に関して「XサエP」が述べていることなのである。



(8)

### 3. 2. スケール

#### 3. 2. 1. スケールという概念の組み込み

また、サエを含む文の意味を記述するために「スケール」という概念が用いられることがある。たとえば、「太郎さえ来る」という文の場合には⑳のようなスケールが念頭にあり、サエはそのスケールの最低限をマークするものである、というような考え方である。

⑳ (茂木 1999 : 31、㉑)



そのような考え方の代表的なものに澤田 (2007) がある。澤田 (2007) はスケールに関するサエの働きを㉒のように捉えている。

㉒ 話し手は「さえ」を使用し E 値のスケールに依存して E 値の最小値を提示している。  
(澤田 2007 : 73)

サエを使用する際に、必ず㉑のような明確なスケールを念頭に置いているとは限らないが、スケールを念頭に置いている場合に、サエの焦点要素 (上の場合は「太郎」) だけでなく、それより上位に位置しているものについても当該の状況があてはまるというのは正しいように思われる。たとえば、㉓の文は、状況 6 では適切に使用できるが、状況 7 では適切に使用できない。

㉓ (3 位の) 田中選手さえが日本代表に選ばれた。

㉔ 状況 6

世界柔道選手権に出場する日本代表選手を選考する時期となった。毎年、前年度の日本ランキング上位 2 名が選出されているので、今年は 1 位の鈴木選手と 2 位の吉田選手が選出され、残りの選手は選出されないだろうと私は予想していた。ところが、今年度の田中選手の大活躍が認められたのか、ランキング上位の 2 名に加えて、3 位の田中選手までが日本代表に選出された。

前年度の日本柔道ランキング (選出される可能性のランキング)		自分の予想	実際の選考結果
1 位	鈴木選手	選 出	選 出
2 位	吉田選手	選 出	選 出
3 位	田中選手	不選出	選 出
4 位	大野選手	不選出	不選出
5 位	山岡選手	不選出	不選出
...	...	...	...

⇒ 「ok (3位の) 田中選手さえが日本代表に選ばれた。(=㉓)」

㉔) 状況7

世界柔道選手権に出場する日本代表選手を選考する時期となった。毎年、前年度の日本ランキング上位2名が選出されているので、今年は1位の鈴木選手と2位の吉田選手が選出され、残りの選手は選出されないだろうと私は予想していた。ところが、今年度の田中選手の大活躍が認められたのか、実際に日本代表に選ばれたのは、ランキング1位の鈴木選手と、あともう一人は(ランキング2位の吉田選手ではなく)ランキング3位の田中選手だった。

前年度の日本柔道ランキング (選出される可能性のランキング)		自分の予想	実際の選考結果
1 位	鈴木選手	選 出	選 出
2 位	吉田選手	選 出	不選出
3 位	田中選手	不選出	選 出
4 位	大野選手	不選出	不選出
5 位	山岡選手	不選出	不選出
...	...	...	...

⇒ 「# (3位の) 田中選手さえが日本代表に選ばれた。(=㉓)」

状況6と状況7の違いは次のようにまとめられる。

㉕) a. 状況6

X (=田中選手) よりも選ばれる可能性が高いと思っていたすべての選手 x (鈴木選手、吉田選手) について、P (x) (x が日本代表に選ばれる) が成り立つ。

(10)

b. 状況7

X (=田中選手) よりも選ばれる可能性が高いと思っていた選手の中に、P (x) (x が日本代表に選ばれる) が成り立たないもの (=吉田選手) がある。

つまり、「P が成り立つことの可能性」のスケールを念頭に置いている場合には、X よりも P が成り立つ可能性が高いと思っていたすべての x について P (x) が成り立たなければ、「X サエ P」という文は使えないのである。そこで、本稿では、田中 (2010)、田中 (2012) の分析を修正し、「X サエ P」の意味表示 (SR) は次のようになっていると主張する。

㉗ 「X サエ P」の意味表示 (SR)

P (X)

[P (x)]

~~¬P (X)~~

[ $\forall x$  [Prob (P (x)) > Prob (P (X))] (P (x))]

[ $\forall x$  [Prob (P (x)) > Prob (P (X))] (P (x)) ] は、「X よりも P が成り立つ可能性 (probability) が高いと思っていたすべての x について、P (x) が成り立つ」という意味を表す<sup>(註12)</sup>。たとえば状況6における㉘の発話の場合であれば、SR は最終的に次のようになる。

㉘ 状況6における最終的な㉘の SR

[ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた] (田中選手)

[ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた] (鈴木選手)

[ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた] (吉田選手)<sup>(註13)</sup>

~~¬ [ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた]~~ (田中選手)

[ $\forall x$  [Prob ([ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた] (x))

> Prob ([ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた] (田中選手))] (P (x))]

㉘の最下部の [ $\forall x$  [Prob ([ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた] (x)) > Prob ([ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた] (田中選手))] (P (x)) ] が表しているのは、「田中選手よりも日本代表に選ばれる可能性が高いと思っていたすべての x について、 [ $\lambda x_i. x_i$  が日本代表に選ばれた] (x) が成り立つ」ということである。つまり、今の状況においては㉘を述べていることになる。

- ㉔)  $[\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}]$  (鈴木選手) が成り立ち、かつ、  
 $[\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}]$  (吉田選手) が成り立つ

これは事実と合致するため、**状況6**における㉔の発話は適切となる。一方、**状況7**における㉔の発話の場合は次のようになる。

- ㉕) **状況7**における最終的な㉔のSR

$[\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}]$  (田中選手)  
 $[\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}]$  (鈴木選手)  
 ~~$[\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}]$  (田中選手)~~  
 $[\forall x [\text{Prob}([\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}](x))$   
 $\text{> Prob}([\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}](\text{田中選手}))] (P(x))]$

この場合、 $[\forall x [\text{Prob}([\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}](x)) \text{> Prob}([\lambda x_i. x_i \text{が日本代表に選ばれた}](\text{田中選手}))] (P(x))]$  で表される内容 (つまり㉔) は「吉田選手は日本代表に選ばれていない」という事実と矛盾するため、**状況7**における㉔の発話は不適切となるのである。

### 3. 2. 2. 「最低限」とグライスの量の公理

さて、前節で述べたとおり、サエはスケールの最低限をマークするという考え方が一般的なのであるが、本稿㉔で提示したサエの意味で表現されているのは、「XよりもPが成り立つ可能性 (probability) が高いとと思っていたすべてのxについて、P(x)が成り立つ」であり、「Xがスケールの最低限である」とは述べていない点に注意してほしい。これは、サエがスケールの最低限を表すように感じられるのはグライスの「量の公理 (maxim of quantity)」(cf. Grice 1975) の効果であり、サエの言語的意味に「最低限」という概念は含まれていないと考えているからである。そのことを示すために、次の**状況8**における㉔の発話を見てほしい。

- ㉖) **状況8**

世界柔道選手権に出場する日本代表選手を選考する時期となった。毎年、前年度の日本ランキング上位2名が選出されているので、今年は1位の鈴木選手と2位の吉田選手が選出され、残りの選手は選出されないだろうと私は予想していた。ところが、今年度の日本勢の大活躍が認められたのか、今年は、ランキング上位の2名だけでなく、

(12)

上位 4 名までの選手が日本代表に選出された。

前年度の日本柔道ランキング (選出される可能性のランキング)		自分の予想	実際の選考結果
1 位	鈴木選手	選 出	選 出
2 位	吉田選手	選 出	選 出
3 位	田中選手	不選出	選 出
4 位	大野選手	不選出	選 出
5 位	山岡選手	不選出	不選出
...	...	...	...

⇒ 「? (3位の) 田中選手さえが日本代表に選ばれた。(=㉓)」

状況 8 で㉓を発話することは、多少、不自然かもしれないが、容認不可能であるとまでは言えないのではないだろうか。その証拠に、次の (32a) と (32b) を比べてみたい。

㉓ (3位の) 田中選手さえが日本代表に選ばれた (んだよ)。

a. # まあ、(2位の) 吉田選手は選ばれなかった (んだけどね)。

b. \* まあ、(4位の) 大野選手も選ばれた (んだけどね)。

(32a) の発話のすわりが悪い理由は、「(3位の) 田中選手さえが日本代表に選ばれた」という文で「(2位の) 吉田選手が日本代表に選ばれた」ことが推論されるため、矛盾が生じるからであろう。一方、(32b) の発話が問題ない理由は、「(3位の) 田中選手さえが日本代表に選ばれた」という文では「(4位の) 大野選手が日本代表に選ばれなかった」ことまでは推論されず、特に矛盾は生じないためであると考えられる。

ではなぜ状況 8 で㉓の発話が多少なりとも不自然となるのだろうか。状況 8 で㉓を発話すると、次の㉔が推論されることになる。

㉓ (3位の) 田中選手さえが日本代表に選ばれた

⇒ (1位の) 鈴木選手が日本代表に選ばれた

⇒ (2位の) 吉田選手が日本代表に選ばれた

状況 8 では㉓は正しいが、上で述べたとおり、これでは4位の大野選手が日本代表に選ばれたことが推論できない。それに対して、同じ状況 8 で㉔を発話したとすると、㉓が推論され

るので、日本代表に選ばれた選手を必要十分に表すことができる。

㉔ (4位の) 大野選手さえが日本代表に選ばれた

㉕ (4位の) 大野選手さえが日本代表に選ばれた

⇒ (1位の) 鈴木選手が日本代表に選ばれた

⇒ (2位の) 吉田選手が日本代表に選ばれた

⇒ (3位の) 田中選手が日本代表に選ばれた

したがって、㉔よりも㉕の方が過不足なく選ばれた選手を述べるので、グライスの「量の公理」により、㉔は好まれないということである。しかし、特にコミュニケーションとしての情報量を考慮しなければ、㉔を発話することそのものは間違いではない。つまり、㉔の文は、意味論的には「田中選手」が「x が日本代表に選ばれる」のスケールの最低限を表すわけではないのである。

#### 4. 「X サエ P」の意味表示 (SR) のまとめと今後の展望

以上、述べてきたように、サエの意味を正しく記述するためには、「意外性」「随伴命題」「スケール」という概念が不可欠である。そこで、本稿では、田中 (2010)、田中 (2012) の分析を補う形で、「X サエ P」の意味表示 (SR) は㉖のようにしていると提案した。

㉖ 「X サエ P」の意味表示 (SR)

P (X)

[P (x)]

[¬P (X)]

[∀ x [Prob (P (x)) > Prob (P (X))] (P (x))]

このうち、[P (x)] および [∀ x [Prob (P (x)) > Prob (P (X))] (P (x)) ] の部分は、従来、それぞれ「存在の前提 (existential presupposition)」「段階の前提 (scalar presupposition)」と呼ばれてきたものであり、これらはサエの意味に含めるべきかどうかということが様々な形で議論されてきた。本稿では、「存在の前提」については、随伴命題がまったく想起できない状況ではサエの使用が不適切になることから「サエの意味に含めるべきである」と論じ、「段階の前提」については、サエの意味に含めるべきであるが、サエがスケールの「最低限」を表

(14)

すように感じられるのは語用論的な推論の結果であるため、サエの言語的意味に「最低限」という概念は含めるべきではないと論じた。

筆者は、認知科学の立場に立ち、文の「意味」を「情報」という観点で捉え、「意味の理解」を「知識の計算の所産」と見なすことによって、人間はどのようにして文の「意味」を計算し理解するのかという問題に答えていくことを目指している。そのために、人間の知識状態をモデル化し、言語によって知識状態がいかに変化していくかを捉えようとしている<sup>(註14)</sup>。本稿で扱ったサエは、「ある個人がある事態について『もともとは』どう思っていたか、そして『今は』どう思っているか」という知識状態の変化を表すものであり(⑦における、「 $\neg P(X)$ 」の部分と「 $P(X)$ 」の部分それぞれがそれに相当する)、また、聞き手に対して推論を誘発するものである(⑧における、「 $P(x)$ 」の部分と「 $\forall x [\text{Prob}(P(x)) > \text{Prob}(P(X))] (P(x))$ 」の部分それぞれがそれに相当する)<sup>(註15)</sup>。ことから、まさに「ことばによる人間の理解のさま」や「ことばを用いた情報交換のあり方」を解明するための重要な手がかりを与えてくれるものである<sup>(註16)</sup>。今後は、サエが話し手にとって「 $\neg P$ から $P$ へ」という知識の変化が起こった場合だけでなく、聞き手に対して「 $\neg P$ から $P$ へ」という知識の変化を起こさせることを意図した場合にも「 $X$  サエ  $P$ 」は適切に使うことができる<sup>(註17)</sup>という側面に注目し、話し手による「 $X$  サエ  $P$ 」の発話、聞き手による「 $X$  サエ  $P$ 」の理解の両側面を捉えられるよう、モデルの精緻化を進めたい。

## 注

- (1) サエは、「これさえあれば百人力だ」(沼田 2000 : 174, (65b)) のように条件文中にある場合には特殊な解釈を持つことが知られており(「最低条件のサエ」(沼田 1986, 2000, 2009 など)や「唯一条件のサエ」(寺村 1991) などと呼ばれる)、サエの意味用法を網羅的に記述するためには避けて通れない点なのであるが、本稿では、紙幅の都合上、この場合のサエの解釈については論じないこととする。また、「子どもでさえ知っている」(菊池 1999 : 8, (7)) のようなデサエという形式についても考察の対象外とする。(デサエ(とサエの共通点・相違点)については菊池 1999, 2003 に詳しい。)
- (2) ここで挙げたもののほか、坂原 (1985)、野口・原田 (1996)、三井 (1997)、澤田 (2007)、中西 (2012) など、様々な観点からサエの意味の記述や形式化が試みられている。
- (3) 「顕著例取立て」という名称は、宮田 (1980) においては「予想外取り立て」に改められている。
- (4) ここでの「 $P$ 」は述語、「 $N$ 」は名詞、「 $X$ 」はとりたてられている要素を表す。(寺村 1991 : p.16 および p.58 に基づく。)

- (5) それぞれの用語の定義は次のとおりである。
- a. 「主張」はとりたて詞が明示する意味であり、「含み」はとりたて詞が暗示する意味である。 (沼田 2009 : 38)
  - b. 「断定」とは、話し手がそれを真または偽として断定するもの、「想定」とは、真偽を断定しないもののことをいう。 (沼田 2009 : 41-42)
  - c. 「自者」とは、とりたて詞がとりたてる文中の要素であり、「他者」はそれに端的に対比される「自者」以外の要素である。 (沼田 2009 : 37)
- (6) 田中 (2010) 3. 3 節では、この分析と、沼田の一連の論考 (沼田 2009 など) で提示されているサエの意味記述 (本稿の (1 c)) との違いについて論じている。
- (7) “shadow sentences” というのは Kuroda (1965) で提起された概念である。
- (8) 田中 (2012) は、サエの焦点に注目してサエを含む文の統語構造およびそのような構造を生み出す Computational System についての提案を行い、さらに、「焦点として解釈される」ということを理論的に説明するため、LF から SR にかけての写像規則等を提案している。ここで紹介している随伴命題についての議論はその一部である。
- (9) これは Karttunen and Peters (1979) 以来、「存在の前提 (existential presupposition)」と呼ばれているものにほぼ相当する。
- (10) (15e) は(16)を理解するのに必要な概念ではないが、後述の②を理解するために必要なのでここに一緒に挙げておく。
- (11) 状況 5においても(19)は適切たりうと思う人がいるかもしれないが、その場合は、「近藤がねずみ以外のものを食べた」や「近藤が『ねずみを食べる』以外のことをした」を何も想定していないかどうかをもう一度確認してみしてほしい。もし想定していたのであれば、これらのことを想定しないようにして改めて判断してみるか、あるいは状況 5よりさらに随伴命題が想起しにくい状況を作って判断してみしてほしい。ここで重要なのは状況 5そのものではなく、「近藤がねずみ以外のものを食べた」も「近藤が『ねずみを食べる』以外のことをした」も想定していない (想定できない) 状況においては、(19)の使用は不適切となる、ということだからである。
- (12) これは Karttunen and Peters (1979) 以来、「段階の前提 (scalar presupposition)」と呼ばれているものに相当する。
- (13) サエの言語的意味として必要とされる随伴命題は1つであるが、2つ以上存在していてももちろんかまわない。そのような場合、SR においては⑧のようにすべての随伴命題が並列されて表現されるとしておく。
- (14) 筆者が念頭に置いている意味理解モデルの全体像やその詳細については、田中 (2009)、田中 (2010)、田中 (2012) を参照してほしい。



(16)

- (15) 具体的には、「太郎さえが焼酎を飲んだ」ということは、太郎以外に焼酎を飲んだ誰かがいるのだろうか」や、「(3位の)田中選手さえが日本代表に選ばれた」ということは、2位や1位の選手も日本代表に選ばれたのだろうか」など。
- (16) サエの他にも、モヤダケといった他のとりたて詞、例示を表すヤヤナド、モダリティのラシイやヨウダなども同じく重要な手がかりとなると考えている。
- (17) 田中 (2010) 脚注 12 を参照してほしい。

### <参考文献>

- 菊地康人 (1999) 「サエとデサエ」、『日本語科学』第6号、pp.7-31、国立国語研究所。
- 菊池康人 (2003) 「現代語の極限のとりたて」、沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて——現代語と歴史的变化・地理的変異』、pp.85-105、くろしお出版。
- 坂原茂 (1985) 「“さえ”の語用論的考察」、『金沢大学教養部論集(人文科学篇)』、Vol.23、No.2、pp.127-158、金沢大学教養部。
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』、くろしお出版。
- 田中大輝 (2009) 『接続名詞句のスコープと文の意味理解モデル』、博士論文、九州大学。
- 田中大輝 (2010) 「とりたて詞サエの「意外性」再考」、『中華日本研究』第2期、pp.35-51、中華大學人文社會學院應用日語學系。
- 田中大輝 (2012) 「日本語のとりたて詞サエの焦点と統語構造」、『台大日本語文研究』第23期、pp.155-184、國立台灣大學日本語文學系。
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』、くろしお出版。
- 中西久実子 (2012) 『現代日本語のとりたて助詞と習得』、ひつじ書房。
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」、奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』、pp.105-225、凡人社。
- 沼田善子 (1987) 「とりたて」、寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人『ケーススタディ日本文法』、pp.72-77、おうふう。
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」、金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法2時・否定と取り立て』、pp.151-216、岩波書店。
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』、ひつじ書房。
- 野口直彦・原田康也 (1996) 「とりたて助詞の機能と解釈—量的解釈を中心にして—」、郡司隆男 (編)、日文研叢書『制約に基づく日本語の構造の研究』、pp.145-166、国際日本文化研究センター。
- 三井正孝 (1997) 「現代日本語におけるとりたて詞サエの意味」、『新潟大学国語国文学会誌』

- 第39号、pp.34-45、新潟大学人文学部国語国文学会。
- 宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪郭』、三省堂。
- 宮田幸一 (1980) 「格助詞と取り立て詞」、『言語』、Vol.9、No.12、pp.68-77、大修館書店。
- 茂木俊伸 (1999) 「とりたて詞「まで」「さえ」について—否定との関わりから—」、『日本語と日本文学』第28号、pp.27-36、筑波大学国語国文学会。
- Grice, Herbert Paul (1975) Logic and conversation. In Cole, Peter & Morgan, Jerry (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. pp.41-58, Academic Press.
- Karttunen, Lauri and Peters, Stanley (1979) Conventional implicature. In Oh, Choon-Yu & Dineen, David (eds.), *Syntax and Semantics 11: Presupposition*. pp.1-56, Academic Press.
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT.

(たなか だいき・本学教員)